極楽寺だより

2014（平成26）年4月号

発行所：極楽寺（浄土真宗本願寺派）　〒759-3803 山口県長門市三隅下野波瀬 3633 ☎0837-43-0625

春の永代経法座のご案内

慈しみの光あふれる春となりました。

生命の息吹を感じるとき、お浄土の人となられた方々が懐かしくしのばれます。

如来さまのおすくいのご恩、お育てのご恩を味わい、仏祖のご恩を感謝して、春の永代経法要を次のとおりおつとめします。お誘いあわせ、お参り下さい。

四月十六日（水）
昼一時半　夜七時半

四月十七日（木）
昼一時半

講師　福岡 前原市 正善寺住職
原田 円城 師

花まつり

※　甘茶お持ち帰りをご希望の方は、どうぞお申し出下さい。

四月八日は、お釈迦さまのご誕生を祝う花まつり。花御堂を飾り、お釈迦さまの誕生時のお姿に甘茶をかけてお祝いします。花御堂は、生誕の地「ルンビニーの花園」をあらわし、甘茶は「ご誕生の際に、甘露の雨が降った」という言い伝えによるものです。

極楽寺では、春の法要の二日間、本堂に花御堂を飾ります。

ご自由に甘茶をかけ、お飲み下さい。

オシエノカケラ

極楽寺だより エッセイ

毎日、お参りしましょう！
キャンペーン　第八弾

枠組みが揺さぶられる

昔は、当たり前のようにそれぞれの家庭にあった「お仏壇に手を合わせる風景」が、気がつけばすっかり珍しいものになってしまいました。そんな時代に、お参りの大切さ、お仏壇のはたらきを再確認したいという思いではじまったこの企画。気がつけばすでに三年目、八回を数えます。今回から、いよいよ最終章に入ります。まずは、これまでを振り返ってみましょう。

第一回　照らされる経験

第一回『照らされる経験』では、自分の人生を輝かせようとする現代とは、闇の中で松明を燃やしているような姿だと譬えました。手元は明るくなるけれども、向こうの闇はますます深くなる。そうして、生きる方向を見失っているのではないかと。

逆に手元の灯りを消せば、だんだん闇に目が慣れて、あるかないかに照らして下さる光に気づき、自分の姿も行くべき方向も明らかになる。先輩方は、お仏壇の光に照らされながら、自分がどんな世界に支えられ生かされているのか、いのちの行き先はどこなのかを見つめながら、人生を歩まれたのだというお話でした。

第二回　「効く」と「聞く」

第二回『「効く」と「聞く」』では、お仏壇や阿弥陀様は、私の願いに「効く」ためものではないことを確認しました。

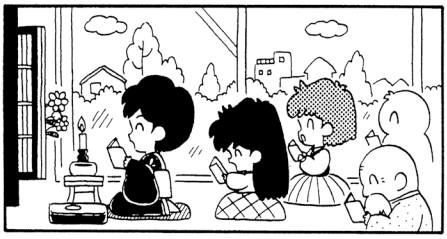
私たちは、自分の願いがかなえば幸せになれると思っていますが、阿弥陀様の光に照らされた時に、「こうでありたい」「こうならなくては、いけない」という願い自体が、苦しみの原因であると知らされます。そんな私たちを心配し、悲しみ、慈しんで下さる阿弥陀様の願いを「聞く」場が、お仏壇なのです。

第三回　亡くなった人がいないのに、お仏壇は必要ですか？
第五回　見失ってはいませんか

第三回目『亡くなった人がいないのに、お仏壇は必要ですか？』と第五回目の『見失ってはいませんか』では、お仏壇とは単なる

先祖供養の場ではないことを指摘させていただきました。

私たちは亡き人や先祖を、たたるもののように怖れてはいないでしょうか。友引葬を避けるのは、その象徴ともいえるでしょう。それは、亡き人と仏さまとして出遇うのではなく、怨霊や亡霊のように扱うことでしかありません。



願い事をかなえるためには、手も合わせるし、頭も下げる。たたりが怖いから、それを鎮めるためにお仏壇を用意する。それはすべて『自己中心、他を思えない、感謝の気持ちに欠ける』態度です。

仏様に手を合わせるとは、『自己を見つめる・他者を思う・感謝』の表現なのです。それは、亡き人を尊ぶことにおいて、そして心豊かに生きる上において、本当に大切なことだと言えるでしょう。

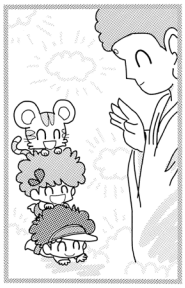
第四回　我に返る

第四回目『我に返る』では、現代社会において、自分を振り返る場所、誰もがその場を敬い姿勢を正す場所の重要性、必要性を述べさせていただきました。人間同士の距離感は、様々なものがあった方が息を抜けたり、逃げ場ができるのですが、今の時代は近すぎるものだけ、遠すぎるものだけと極端な場合が多く、息苦しさや寂しさもつきまとってしまいます。いつ爆発するかわからないストレスを抱えている方も多いのではないでしょうか。そんな時にお仏壇に手を合わす、お念仏申すことで間が取れたり、我に返ることができるのです。そんな場が、一番求められている時代に、お仏壇が一番いらないものにされていることは、本当に悲しいことだと思います。

第六回　歴史が刻まれている

第六回の『歴史が刻まれている』では、私たちのいのちの行き先は、理屈や知識で考えてもわかるはずはない、なぜなら証明しようがないからだというお話でした。

証明しようのない道を歩もうとするその根拠やリアリティーは、先を歩まれた先輩方の後ろ姿から伝えられてきたのです。お仏壇には、往生人の歴史が刻み込まれています。その後ろ姿から眼を背け、テレビやゲームの画面、そしてお金儲けのことばかり追いかけていては、リアティーを失うはずでしょう。まあ、私もお寺に生まれてなかったら、完全に見失っているタイプの一人なのですが。



（次頁へ続く）

第七回　受け容れられる場所

そして第七回『受け容れられる場所』では、お仏壇の中央におられる阿弥陀様のはたらきをご紹介しました。

近頃は、「自尊感情」（自分自身を価値のある存在としてとらえる感情。うぬぼれやわがままとは違い、未熟さなどのマイナス要素を含めて、自分自身を受け容れることができること。）の大切さが叫ばれています。それだけ、自分を丸ごと受け容れてくれる場所がないということなのでしょうか。役に立てばいいが、役に立たなければ、生きていく資格がないとでもいうような時代なのでしょうか。自分が役に立つということは、人間が生きる上で大きな喜びであり生きがいでもありますが、逆に役に立たなくなった時に、生きる拠り所を見失うことにつながりかねません。

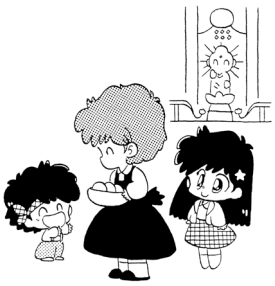
こんなナゾナゾをご存知ですか。「だれにも 相手にしてもらえない くだものって なあに？」答えは「ようなし（洋梨）」です。昔は笑いにもならなかったようなナゾナゾが、とても切なく響くのはなぜでしょう。「生きる資格」なんてない。誰もがかけがえのない存在なのだと願いをかけられ、私たちをそのままに受け容れて下さる仏様が阿弥陀様であり、阿弥陀様と出遇う場所が、お仏壇なのです。↘

自分の思いが、自分を苦しめる

さて、これまでの連載で指摘したことは、「自分を中心とした考え方」が、自分を迷わせ、苦しめていくのだということに尽きるのではないかと思います。

自分を輝かせようとするほどに、周りは見えなくなる。自分の都合の悪いことは、亡き人のせいにする。自分の思いが大きくなるほどにその思いを扱いかね、欲望を追いかけることで先を往く人の後ろ姿を見失う。そして終いには、自分の思いにかなわないような私は生きる資格がないと、自分を追い詰める。すべて「自分の思い」が出発点にあります。

仏教は、「こうでなければならない」「役に立つ、立たない」「損か、得か」「敵か、味方か」という自分が持っている思い、枠組みで周りや自分を見て、それに合うか合わないかで一喜一憂することが、苦悩を生み出すのだと指摘します。私の思いという枠組みからなかなか逃れられない私たちですが、心を落ち着けて、枠組みを見つめ直したり、離れて見たりという時間と場所があるということは、とても大切なことであるはずです。↖



「ねぐら」から「家」へ

相愛大学の釈徹宗教授は、お仏壇とはまさしくそんな場所であり、居住空間の中における軸となる場所であると言われています。

うれしいことがあれば語りかけ、悲しいことがあれば告白し、苦悩があれば相談する。何か贈り物をもらったら、ここにお供えする。ときどきお花を摘んでお供えする。それが、自分の枠組みを揺さぶり、外との回路を開き、風通しをよくすることに繋がっていくのだと。

釈先生は、著書『いきなりはじめる仏教生活』の中で、

「居住空間の中に明確な軸を設定しませんか。／どんなものでもいいんですよ／見えないけれども限りないいのちである仏さまをおまつりする／簡単なのでいいんですよ／ご本尊だって、自分で描いてもかまいません」

と、お仏壇を家に置くことを薦められていますが、若い方からの反響が大きく、驚いたそうです。「ウチにも軸ができた」と大好評だったとか。お仏壇に縁のなかった若い人たちが、軸のある生活を始めた途端、そこが単なる「ねぐら」から「家庭」へと変わったのだと言われます。

「お仏壇がなくても、生活をすることは可能です。／でも、もし家屋に仏間やお仏壇があれば、そこはとても気になる空間になります。あまり放置しておくのは気がかりですし、お仏壇の方に足を向けて寝転がるのも抵抗があります。そのように、家の中に気になるものがある生活と、それがまったく無い生活とでは、きっと生き方や価値観が違ってくるのではないでしょうか。」

（『いきなりはじめる仏教生活』釈 徹宗）

枠組みの外から

自分の思い通りになれば幸せになれるというのが、現代社会に生きる私たちの枠組みですが、その枠組みの外から私に問いかけてくる世界があるのです。その世界との扉が、お仏壇として私たちに用意してあるということは、実はとんでもなくすごいことだと思います。

お仏壇が、気になる存在としていつも私を刺激して下さる。呼びかけて下さる。この有り難さを、もう一度復活させたいのです。とてもモッタイないことなのですから。■

極楽寺
ホームページ
http://極楽寺.com/

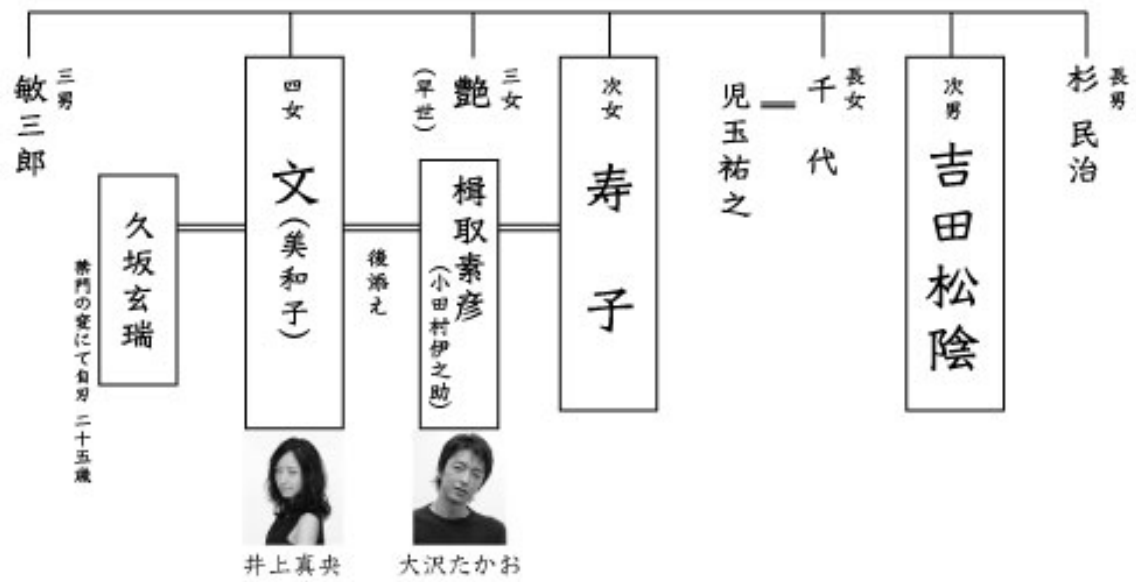
来年の大河ドラマ『花燃ゆ』に決定
吉田松陰の妹が主人公

主演の井上真央さん

2015 年のＮＨＫ大河ドラマが発表され、吉田松陰の妹・文（後の美和子）が主人公の『花燃ゆ』に決まり、女優の井上真央さんが主演を務めることになりました。

文は松陰門下の俊英久坂玄瑞と結婚し、久坂の死後、群馬県初の県令（現在の県知事）の楫取素彦（小田村伊之助）と再婚した人物。『明治維新は、この家族から始まった。』がドラマのテーマです。

実は、この大河ドラマの主要人物と極楽寺は、大変親しい関係にあるのです。主人公文さんが、後に再婚する相手楫取素彦さんは、実は文さんのお姉さんの結婚相手。四十三歳で亡くなられたお姉さんの後添えで、再婚されるわけです。



極楽寺と親しい関係にあったのは、このお姉さん寿子さんと楫取素彦さんの御夫婦です。

松陰亡き後、松下村塾をまかされた楫取素彦（小田村伊之助）は薩長同盟成立などに活躍しましたが、明治新政府樹立後、二年間ほど三隅二条窪に居住。

この間、熱心な念仏者であった寿子さんが、村人と共に、月二回の法座を開いていたようです。当時の極楽寺住職蒙照とご縁ができたのが、その頃。極楽寺の座敷には、松陰の書と寿子さんの書があります。↗

楫取素彦役に、大沢たかお

ちなみに、このドラマのキーマンは、楫取素彦（小田村伊之助）でしょう。なぜなら、吉田松陰や久坂玄瑞を差し置いて、主人公の次に配役が決まったのが、楫取素彦なのですから。楫取役には、テレビドラマ『ＪＩＮ－仁－』などでお馴染みの実力派俳優、大沢たかおさんが決定しています。

楫取夫妻については、前々住職大融と前住職宏證が長年研究、調査をしてきました。楫取素彦没後百年には、群馬県の新聞社『上毛新聞』から取材にきたほどです。

さて次は、どんな女優さんが寿子さんを演じるのかに注目です。そして、ドラマ放送後の『紀行』に極楽寺は取り上げられるのでしょうか。

妄想ばかりがふくらむ今日此の頃です。■

楫取素彦（小田村伊之助）を演じる大沢たかおさん

山口新聞 東流西流

山口新聞のコラム『東流西流』三月・四月の木曜日担当に、住職がご指名をいただきました。二年半ぶり二回目のご縁となります。

今回は、ＰＴＡの会長をしていることもあり、その立場から教えられたことを中心に、書いてみようと思っています。『極楽寺だより』やホームページにも転載いたしますので、どうぞご覧下さい。■

東流西流

池信　秀見

やりたくなくても

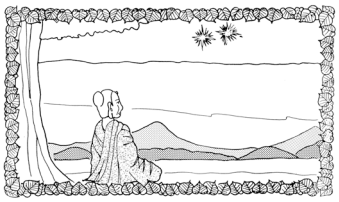
最近、地域や市の役職、保護司、ＰＴＡ会長等、沢山の役を引き受けることになり忙しくしています。あまりお役に立てていないので恐縮なのですが。ただ、好きで受ける訳ではなく、できれば避けたいのが本音です。しかし色んな経験をさせていただく中で、様々な役があり、それを担う人々によって世の中が成り立っていることを教えられています。そして私自身そんな方々に育てられてきたのだと気づかされるのです。

ならば、まずは先輩方へ感謝し、できることだけでもさせていただこうと思うのです。近頃は「やりたいこと、好きなことを見つけよう」と言われますが、そのことで「やりたくない、嫌いなことはしない」という感覚も広がってしまったのではないでしょうか。やりたくなくても大切なことはあるのです。嫌でもしなくてはならないことがあるのです。それを担って下さる方がいなかったら、世の中はどうなるのでしょう。

要領良く、面倒なことから逃げた者勝ちという風潮を、映画監督黒澤明氏の言葉を借りれば「高い木に登って、自分のまたがってる木の枝を一生懸命切っている阿呆」ということにでもなるのでしょうか。そうなっていないかと自らに言い聞かせながら日々取り組んでいることです。もう少しお役に立てれば尚よいのでしょうが。

（長門市、住職・三隅中ＰＴＡ会長）

（山口新聞　2014（平成 26）年 3 月 6 日掲載）



極楽寺掲示伝道
けいじでんどう

４月の言葉

二〇〇八年に東京地域限定で、ＡＣ公共広告機構のこんなコマーシャルが流れたそうです。

「高齢化社会が進む中、電車やバスの中で、もたついて転ぶお年寄りが増えています。

他の人に迷惑をかけないようにと、早く席を立つことが原因のようです。

もたつくことを見守れるくらい、心にゆとりある社会にしたいですよね。

もたつく権利よろしーく。」

素敵なＣＭだと感心していたのですが、インターネットではかなり叩かれていた様子。理由は、「もたつく権利」という部分です。お年寄りへ配慮することはわかるけれども、それを「権利」として主張されることには、↘

思いを持つ人がいるのだとか。

≪「私にはもたつく権利がある。黙って待ってろ。」って主張されたくない。≫

≪ならば若者が、「俺たち若いし、焦る権利よろしく」と言えるのでは。≫

という意見が、書き込まれていました。

「権利」「人権」「平等」とは、差別が当たり前だった時代から、たくさんの先輩方の血の滲むご苦労の中で、掴みとられたものでした。ところがその歴史への感謝の思いもなく、当り前のように、しかも安易に「権利」という言葉が使われることで「我がままを主張する人が使う言葉」というイメージが、すっかり定着してしまったのです。

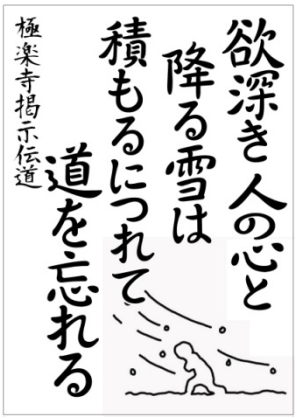
「権利」とは、私だけが尊いということではありません。すべての人間が尊いということです。ならば、私の尊さを主張することは、同時に相手の尊さへの敬いが不可欠です。家族も他人も、よく知っている人も知らない人↘

好きな人も嫌いな人も尊いのです。それを見失ってしまうことは、先達の苦しみや営みを踏みにじることにさえなるのです。

しかし、そんな背景を鑑みても、「もたつく権利」への反発には驚かされます。なぜなら、反発する人には、自らもやがては老い、病み、弱っていくという厳粛な事実が見失われているからです。それは「今の元気な私」を基準にした、ある意味傲慢なものの見方です。

自らを、強者、善人、賢者の立場に置くことの限界が、そこにはあります。今の時点でどんなに強くても、やがて弱い立場になっていく。縁に触れれば、どんなことをしでかすかわからない私である。親鸞聖人は、「底下」の立場に身を置き、物事を見ていかれた方なのです。

そこから見える景色は、すべてのいのちが、阿弥陀様から願われているという事実でした。みんな同じ大地に樹っているいのちの事実であったのです。■



２月の言葉

高橋泥舟の言葉

（勝海舟、義弟の山岡鉄舟と共に「幕末の三舟」と呼ばれた槍の名手。槍一筋、節義一筋の生き方が、賞賛された。）

雪の深い山では、風が一方方向に吹く尾根などに、雪庇とよばれる雪の塊ができるそうです。それは屋根の庇のように突き出すのですが、下は空洞ですから上に人が乗ると、そのまま崩れ落ちてしまうので大変危険です。

雪山では沢も雪に覆われますが、その下は水が流れています。これをスノーブリッジというそうで、知らずに上を歩くと↘川に落ち込み、救出はかなり困難だとも言われます。

雪山では、尾根や沢は本当に危険です。しかし、もっと危険なことは、その怖ろしさに無頓着でいることであり、道を見失っていることに無自覚なことではないでしょうか。

私たちの生きている現代社会は、消費の拡大が好景気を生み、生活に潤いをもたらすのだと主張されます。欲を持つことは、向上心を生むのだとも言われます。しかし、どんなに力強く歩むことができても、どこに向かって生きているのか、自分がどこを歩んでいるのかという「道」を見失ってしまうならば、人生の雪庇やスノーブリッジに落ち込んでしまうことにもなりかねません。

以前、ある幼稚園の「強く、明るく、元気な子を育てる」という目標を見て、↘「強く人をいじめる。明るく人を傷つける。元気に人を殺す。」そんな子に育ってもらっては困ると言われた方がありましたが、その言葉のままの光景が、現実に起こっているように思うのは、私だけではないはずです。歩む力を育てても、進むべき道を見失う怖ろしさを感じます。

雪に覆われた山では、経験を積まれた方の先導が頼りです。欲に覆われた現代社会でも、欲望と深く向き合う中で、進むべき道を見出された方の導きが頼りになることでしょう。親鸞聖人とは、これでもかと自分の中の欲望と向き合われ、そこからお念仏の道と出遇われた方でした。その道が、長い歴史を通して私たちのところにまで届けられているのです。見失わぬようにしなくてはなりません。■

３月の言葉

極楽寺掲示伝道

昔々あるところに、欄干もなく、雨が降れば消えてしまうような、小さな一間幅の橋がありました。そこに旅人がやってきて、足を踏み外してしまったのです。咄嗟に橋の袂にしがみつきました。何とか上ろうともがくのですが、うまくいきません。

するとそこへ、お百姓さんが通りかかりました。「助けてくれ」と叫ぶ旅人。お百姓さんはニヤニヤしながら、「手を離しなさい」と言って、その場を立ち去ろうとしました。「なんと薄情な、助けてくれ、助けてくれ」と叫んでも、振り返り、また「手を離せ」というのです。そうはいかない旅人は懸命にしがみついていたのですが、とうとう力尽きてしまいました。

「助けてくれ～」まっさかさまに落ちたと思った大地はすぐそこだったというお話です。

私たちは、いろんなものにしがみついて生きています。お金やモノ、名誉や肩書き。ちっぽけなプライドや強さ。「これを手放しては、生きてはいけない。」そうやって、自分の思いにしがみつき、落ちたらお終いだと、自分で地獄を作っているのが私たちの姿ではないでしょうか。

しかし、落ちるということは大切なのです。落ちて、大地に足がつくということが大切なのです。

金子大栄という先生は、

「落ち着くというのは、落ちて着くのですよ。」

といわれています。落ちたところには、大地がある。私を支えて下さる人たちがいて、私を思って下さる世界がある。私の力だけで生きていると思ってきたことの傲慢さを、知らされることが大切なのです。

手を合わせ、拝む心とは、まさしく自分のちっぽけさと、包んで下さる大きな世界と出遇う姿です。

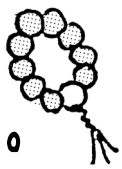
心落ち着いた世界が、そこにあるのです。■

極楽寺だよりを送りませんか

都会に出ておられる子どもさん、お孫さんたちへ。
有縁の方々へ。お寺から、直接郵送します。

お寺まで、お持ち下さい。

お念珠 修理いたします。



❏今回から、「毎日、お参りしましょうキャンペーン」がいよいよ、最終章に入ります。これまでを振り返ったことで、またまた文章が長くなり、全体で１０ページになってしまいました。長文ですが、どうぞおつきあい下さい。